

## 研 究

# 父親の育児ストレスの実態に関する研究

清水 嘉子

### 【論文要旨】

本研究は、父親の育児ストレスについて明らかにし、さらに父親の育児信念との関係について検討した。乳幼児期の子育てをしている父親93名から得られた回答をもとに分析を行った。その結果、父親の感じる育児に伴う情動反応は、「不安、恐怖、心配」の41.7%と、「怒り、イライラ」の40.0%に二分される。また、父親の育児ストレスは、9要因に分類され、「子どもの自己本位な特性(75件)」がもっとも多く、ついで「育児への自信のなさ(30件)」となっていた。育児信念との関係では、育児信念6項目すべてを肯定する信念傾向を持つ父親は、不安を感じていることが示された。育児信念に対して「こころあるべき」と考えるほど不安傾向が高まることが示唆された。

**Key words :** 父親, 育児ストレス, 実態, 育児信念

### I. はじめに

本研究は、父親の育児ストレスについて明らかにし、父親の育児信念との関係について検討することにある。

内閣府政府広報室<sup>1)</sup>の調査では、現代の父親は、子育てに時間を割きたいと考えているが職場環境などから実行に移せない実態が明らかになっている。こうした背景に、育児と仕事との両立がうまくできない父親が、残業やリストラ不安などに加え、家事・育児の協力を精一杯やっているにもかかわらず、妻に理解されず板挟みになっていると考えられ、近年そうした父親が増えているといわれている。母親の育児ストレスは<sup>2)</sup>、韓国・中国・ブラジルに比べ、わが国は育児を取り巻く人々、とりわけ夫に対する不満が認められることが特徴といえる。こうした中で育児支援対策の一つとして父親の育児に対する理解と協力についてが上げられ、父親が仕事以外の新たなストレスを抱える状況にあるともいえる。これらの問題解決には、社

会政策のみならず父親に対する妻の理解が重要になってくるといえる。

岩田ら<sup>2)</sup>によると、父親としての役割獲得にはストレスが伴うことを指摘しており、父親の育児ストレスは社会現象として注目されているが、これまで十分解明されてはいない。母親の就労が子どもに悪影響がないということを内閣府有識者懇談会が結論している中で、今後ますます共働きによる子育て家庭が増えていくことが予想され、今回、父親の育児ストレスの実態を明らかにしていくことは、少子化の時代にあって、育児支援策を模索するうえで有意義と考える。

さらに、男女共同参画事業が浸透してきた中で、欧米諸国に比べわが国の家事・育児の分担状況は、ほとんど変わっていない。その背景には、根強い性役割分業と社会通念があると考えられる。こうした背景をふまえて、本研究では父親の育児に対する態度、努力、価値、役割、愛情に関する育児観やその強さ(育児信念)を明確にし、父親の育児ストレスとの関連につい

A Study on the Reality of Child Care Stress in Father

Yoshiko SIMIZU

長野県看護大学(研究職)

別刷請求先: 清水嘉子 長野県看護大学 〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694

Tel/Fax: 0265-81-5181

(1727)

受付 05. 5. 9

採用 05.10.31

て検討する。

## II. 研究方法

### 1. 研究目的

①父親の育児ストレスについて明らかにする。②父親の育児ストレスと育児信念の関係について検討する。

### 2. 研究デザイン

半構成式自由記述によるアンケート調査法を用いる。

### 3. 対象

①対象の抽出は便宜的抽出法を用いる。②対象の条件：乳幼児期の子育てをしている父親100名。S市内2箇所の保育園に子どもをあずけている父親を対象とする。

### 4. データ収集方法

データ収集時期：平成16年7月～9月

データ収集の手順：保育園に研究の趣旨を説明し、了解を得られた園に子どもをあずけている父親を対象に説明文を配布、同意を得られた者を対象に調査用紙への記入を依頼。調査用紙は園で配布し園で回収する。

### 5. 調査用紙の内容

父親の年齢、子どもの数、家族形態、妻との会話の頻度、家事育児時間に加え、父親が育児中に経験するネガティブな情動がいかなる事情のときに生じているかを自由記述法によって収集する。その際に質問は、1) 不安、2) 恐怖、3) 心配、4) 怒り、5) イライラ、6) むなしさ、7) 悲しみ、8) 疲れ、9) 不満の9つに分けて、各対象者にその程度について4段階（いつもある～全くない）で回答し、それぞれ思い起こした内容を記述してもらう。

信念とは、「理屈を越えて堅く信じ込むところ」と一般的に考えられ、本研究では育児信念を、育児に対する考えとその強さ（変化の不変性）ととらえた。そこで、「子どもを産む価値」<sup>5)</sup> および「よい親の概念」<sup>6)</sup> から育児に対する考え方を参照として信念の基本概念として考えられている態度、努力、価値、役割、愛情に該当

する項目を各1項目作成した。ただし愛情については重要であることから1項目付加し6項目とした。育児信念に対する考えとして2選択肢（賛成、反対）、考えの強さとして5選択肢（絶対変わらない～絶対変わる）から選択した。

### 6. 倫理的配慮

本研究の調査に先立ち保育園長に研究目的、方法、意義、守秘義務、研究の協力および協力拒否が可能であることなどを説明し、研究の協力への承諾を得た。保育園長より母親への本調査の説明を依頼文をもって行い、調査に協力すると意志表示した者のみに協力を依頼した。また、本調査において特定の個人的情報が遺漏しないよう処理する旨（コード化し廃棄する）を調査文に明記し、回答は本人の選択に基づいて記入できるようにした。

### 7. データの分析方法

収集したすべてのデータは、なるべく抽象度を統一するように留意しながら、一つの内容を意味する記述文に整理する。結果としてまとめられた父親の育児ストレスと、先行研究<sup>7)</sup>で明らかにされている、母親の育児ストレスと比較し考察を試みる。さらに、父親の情動（いつもある5点～全くない1点）と育児信念に対する考え（賛成2点、反対1点）、考えの強さ（絶対変わらない5点～絶対変わる1点）について統計学的分析を行った。

## III. 結果

### 1. 調査用紙の回収率

2箇所の保育園に60部ずつ配布し、回収は54部（回収率90%）、39部（回収率65%）、計93部（回収率77.5%）であった。2箇所の施設の回収率に差があったことから、両群間の属性の検定を行ったところ有意な差は認められなかった。

### 2. 対象の属性

父親の年齢は、平均37歳、偏差値5.2（最大51歳、最小24歳）であった。

子どもの数は平均2.1人（偏差値0.8）、家族形態は72%が核家族であった。

妻との会話の頻度について4段階(いつもする～全くしない)では、妻との会話の頻度は、「いつもする」や「良くする」をあわせて59人(63.4%)を占め、「たまにする(27人)」から「全くしない(2人)」をあわせると29人(36.6%)であった。

また、家事育児時間は平日に全くしないが12人、休日では1人、平日では1時間以下が47人とともに多く、休日では3時間以下が59人と多くを占めていた。平日の平均値は78.2分(偏差値83.3)、休日の平均値は347分(偏差値327.9)であった。全国<sup>1)</sup>および前年度同地域で行われた父親の育児・家事協力調査<sup>7)</sup>と比較すると父親の育児・家事協力はやや少ないといえる。

### 3. 情動別育児ストレス件数(表1)

93名中6名(6.5%)は、9つの情動項目に「ない」と答えていた。

父親の育児ストレス項目に対して感じる情動で、「不安、恐怖、心配」の合計件数が101件(41.7%)と最も多く、ついで「怒り、イ

ライラ」は75件(40.0%)、「疲れ」は31件(12.8%)、「悲しみ・むなしさ」は20件(8.3%)、「不満」は13件(5.4%)であった。1人平均2.6件の情動に伴う育児ストレスが記載されている。

### 4. 情動別ストレス度

各情動別にとらえた4段階別ストレス度では、「心配」が最も高く2.47を示し、ついで「不安」は2.32、「疲れ」は2.28、「イライラ」は2.26、「怒り」は2.21、「不満」は2.16であった。特に「むなしさ、恐怖、悲しみ」については1.6～1.7を示し低かった。

### 5. 育児ストレスの内容(表2)

父親の育児ストレス項目については、述べ242件の内容から9カテゴリーに分類した(表2)。

「子どもの自己本位な特性(75件)」が最も多く、その内容はいうことを聞かない、わがまますぎる、泣く、騒ぐ、散らかす、いたずらするなど子どもが本来持っている特性に対する

表1 父親の育児ストレス項目別、情動別ストレス件数

(件数)

ストレス項目	情動	不安・恐怖・心配	%	怒り・イライラ	%	疲れ	%	むなしさ・悲しみ	%	不満	%	ストレス項目別合計
①子どもの自己本位な特性		2	2.6	58	77.3	7	9.3	7	9.3	1	1.3	75
	%	2.0		77.3		22.6		9.3		7.7		31.0
②子どもの成長への気がかり		38	90.5	2	4.8	0	0.0	1	2.4	1	2.4	42
	%	90.5		2.6		0.0		5.0		7.7		17.4
③育児への自信のなさ		27	90.0	3	0.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	30
	%	26.7		4.0		0.0		0.0		0.0		12.4
④自分に対して		1	3.6	5	17.9	11	39.3	9	32.1	2	7.1	28
	%	1.0		6.6		35.5		45.0		15.4		11.6
⑤混沌とする社会事情		20	95.2	1	4.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	21
	%	19.8		1.3		0.0		0.0		0.0		8.7
⑥育児環境の不備		9	60.0	1	6.7	0	0.0	1	6.7	4	26.7	15
	%	60.0		1.3		0.0		5.0		30.8		6.2
⑦仕事との両立		0	0.0	1	7.1	13	92.9	0	0.0	0	0.0	14
	%	0.0		1.3		41.9		0.0		0.0		5.8
⑧妻との関係		4	30.8	0	0.0	0	0.0	2	15.4	5	38.5	13
	%	40.0		0.0		0.0		10.0		38.5		5.4
⑨自分の行動への干渉		0	0.0	4	100.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4
	%	0.0		5.3		0.0		0.0		0.0		1.7
情動別合計		101	41.7	75	40.0	31	12.8	20	8.3	13	5.4	242

表2 父親の育児ストレス項目別内容

育児ストレス項目	件数	記述内容
①子どもの自己本位な特性	75	いうことを聞かない、わがまますぎる、いたずらする、泣く、騒ぐ、散らかす、妹をいじめるとき、機嫌が悪い、思い通りに行動しない、かわいがっているのに「お母さんのほうが好き」と言われたとき、「パパ嫌い」といわれたとき、子どもに無視されたとき、親の願いが通じないとき、反発してくるとき
②子どもの成長への気がかり	42	病気、友達と上手に遊べるか、子どもの安全、子どもの性格や健康、容姿、能力に対するもの
③育児への自信のなさ	30	育て方に自信がもてない、これでいいのか、価値観を子どもに押しつけているのでは、子どもの気持ちを理解できているのか、自分のいっていることが理解されているのか、しつけがうまくできていない、父親としてどのように自分の思いを伝えればいいのか、虐待しているのではないかと感じる時、自分の育児方法に対して反応が違うとき、母親でないとこなせない事態があるとき
④自分に対して	28	子どもと遊んでいて疲れる、子どもと接する時間が少ない、家族のために働きそれだけに明け暮れるのがむなし、自分のことが先行しがち、子どもに対してふさわしくない言動のあったとき、接するうえで子どもと大人の違いにギャップを感じる、年を取っていく自分を感じたとき
⑤混沌とする社会事情	21	いつ不可解な事件にまきこまれるかわからない、少年犯罪やいじめ、学校や地域や社会での事件や出来事などが多い、IT産業に子どもがまきこまれ自然とどのように対応できればよいか理解できるのか
⑥育児環境の不備	15	母親が見ているのでこのままでいいのか、交通の問題、学力の低下の問題、父親が子どもの学校行事に参加できるような国の保証がほしい、遊ばせる環境が少ない、保育の受け入れの定員が少ない、児童手当がもらえない、物を大切に扱わない、競争心が薄れている
⑦困難な仕事との両立	14	仕事で疲れているのに子どもと遊ばなければならない、休日朝起きてから夜寝てからも子どもの面倒を見なければならない、自分が疲れているときに子どもがまとわりつくとき
⑧妻との関係	13	妻が子どもに当たる、子どもに甘い、妻の体力が心配、手伝ってやりたくてもできない、一生懸命やっているつもりが認められない
⑨自分の行動への干渉	4	自分のやりたいことができない、自分の思いどおりにならない(寝たいときにうるさくて寝れないとき)、自分の時間が何もないと感じたとき

怒り、不満、疲れであった。しかし、中には「かわいがっているのにお母さんのほうが好き」とか「パパ嫌いといわれたとき」、「子どもに無視されたとき」などにむなしさの情動が示された。

ついで多かったのは「子どもの成長への気がかり(42件)」であった。子どもの病気や安全、性格や容姿、能力、友達関係や将来に関する心配や不安、恐怖や不満、イライラなども示された。

「育児への自信のなさ(30件)」は、育て方に自信がもてない、これでいいのか、子どもを理解できているのか、または、自分のいっている

ことが理解できているかなどの不安や心配を主として、母親でないとこなせない事態や虐待しているのではと感じるときなどにはイライラや恐怖の情動も混じっていた。

「自分に対して(28件)」は、子どもと遊んでいる疲れや自分が年を取っていったり、子どもと接する時間が取れない、家族のために働きそれだけに明け暮れること、自分のことを最優先に行動していることなどに対するむなしさや悲しみ、不満、さらに子どもに対してふさわしくない言動があったときや接するうえで大人と子どものギャップに対して怒りやイライラを感

じていた。

「混沌とする社会事情 (21件)」では、いつ不可解な事件に巻き込まれるかわからない、少年犯罪やいじめ、学校や地域社会で起こる事件に対する不安や心配や恐怖の情動が示されていた。IT産業時代に対する子どもの育ちに対する心配もあった。

「育児環境の不備 (15件)」では、交通事故の問題や学力低下や遊ばせる環境、父親が行事に参加できる保障や保育園の定数の増加や児童手当に対して、物を大切に扱わないことや競争心が薄れていることに対する心配や不安、不満を主として、むなしさや怒りも見られた。

「困難な仕事との両立 (14件)」では、仕事で疲れているのに子どもと遊ばなければならない、休日も朝起きてから夜寝てからも子どもの面倒を見なければならないなどの疲れの情動が見られた。

「妻との関係 (13件)」では、妻が子どもに当たる、子どもに甘い、妻の体力が心配、手伝ってやりたくてもできない、一生懸命やっているつもりが認められないなど不満、不安、心配、イライラ、悲しみ、むなしさなどさまざまな情動が示されていた。

数は少なかったが、「自分の行動への干渉 (4件)」では、自分のやりたいことができない、自分の思い通りにならないなどのイライラが示された。

## 6. 育児信念に対する考えと強さ (表3)

育児信念に対する考えで賛成が過半数を示していた項目は、「父親は子どもに対して無償の愛を与えるものだ」が63人 (67.7%)、「子育ては自分にとって価値がある」が75人 (80.6%)、「父親は子どもに対し無償の愛情をいつも抱いているものだ」が71人 (76.3%)、反対が過半数を示していた項目は、「子どもに対して完璧な父親でなければならない」が68人 (73.1%)、「子育ては女の仕事だ」が71人 (76.3%)であった。「子どもが良く育つも悪く育つも100%親の努力にかかっている」に反対したものが49人 (61.3%)を占めていた。

また、信念の強さについては、すべての項目において「絶対変わらない」から、「たぶん変

わらない」を示し、各項目は65.6%から51.6%で、変化の可能性は低いということが示された。

## 7. 育児信念と情動別ストレス度の関係 (表4)

育児信念の考え・強さと各情動別ストレス度との分散分析を行った結果、「子どもに対して完璧な父親でなくてよい」と考える父親は「不安」を感じていた ( $p < 0.01$ )。「子どもに対する無償の愛を抱き与えるものだ」と考える父親は「悲しみ」、「むなしさ」を感じていた ( $p < 0.05$ )。「子育ては自分にとって価値がある」と考える父親は「イライラ」を感じていた ( $p < 0.05$ ) (表4-1)。

また、「子どもに対する態度としての完璧さ」を除く「子どもに対する愛情」の2項目と、「育児姿勢の努力」、「育児に対する価値」、「女性としての役割」の信念が強いほど、悲しみ、疲れ、心配、不安、怒り、イライラ、むなしさを感じていた ( $p < 0.05$ ) (表4-2)。特に育児信念6項目について肯定している父親は不安を感じていた ( $p < 0.05$ ) (表4-3)。

## V. 考 察

### 1. 育児に伴う情動反応

育児に伴う情動は、「不安、恐怖、心配」の41.7%と、「怒り、イライラ」の40.0%に二分される。同様の調査を母親に行った結果<sup>8)</sup>と比較すると、母親は「怒り、イライラ」を主としながらも他の情動も分散して認められ複雑な情動状態にあるのに比べ、父親の育児ストレスは「不安、恐怖、心配」がもっとも多く、ついで「怒り、イライラ」が続き、「疲れ」や「むなしさ、悲しみ」、「不満」は数としては少なかった。情動別ストレス度では、「心配」がもっとも高く2.47を示した。これは4段階では「たまにある」を示し、ついで「不安」が2.32、「疲れ」が2.28、「イライラ」が2.26、「怒り」が2.21、「不満」が2.16で同様に「たまにある」であった。特に「むなしさ、恐怖、悲しみ」については1.6~1.7を示し低かった。

山下<sup>9)</sup>の情動の性状パターンで分析すると、「持続的な不安・緊張・怒り・興奮など」の第二のパターンである、「交感神経および副交感神経の中程度亢進」によるものに一致しており、

表3 父親の育児信念に対する考えと強さ

項目	考えと強さ				絶対変わらない		たぶん変わらない		わからない		たぶん変わる		絶対変わる	
	賛成	%	反対	%	%	%	%	%	%	%	%	%		
<育児に対する価値> 子育ては自分にとって価値がある	75	80.6	3	3.2	27	29	24	25.8	16	17.2	7	7.5	4	4.3
<子どもに対する愛情> 父親は子どもに対し無償の愛情をいつも抱いているものだ	71	76.3	8	8.6	24	25.8	24	25.8	18	19.4	9	9.7	2	2.2
<子どもに対する愛情> 父親とは子どもに対して無償の愛を与えるものだ	63	67.7	18	19.4	29	31.2	29	31.2	9	9.7	8	8.6	3	3.2
<女性としての役割> 子育ては女の仕事だ	9	9.7	71	76.3	33	35.5	21	22.6	14	15.1	8	8.6	0	0
<子どもに対する態度> 子どもに対して完璧な父親でなければならない	12	12.9	68	73.1	46	49.5	15	16.1	11	11.8	0	0	1	1.1
<育児姿勢の努力> 子どもが良く育つも悪く育つも100%親の努力にかかっている	31	33.3	49	61.3	34	36.6	22	23.7	12	12.9	5	5.4	2	2.2

表4-1 父親の育児信念に対する考えと情動別ストレス度

項目	情動			
	不安	悲しみ	イライラ	むなしさ
<子どもに対する態度> 子どもに対して完璧な父親でなければならない	4.843**	0.953	0.955	0.959
<子どもに対する愛情> 父親とは子どもに対して無償の愛を与えるものだ	1.003	3.362*	0.753	0.472
<育児に対する価値> 子育ては自分にとって価値がある	0.286	0.385	2.891*	0.706
<子どもに対する愛情> 父親は子どもに対し無償の愛情をいつも抱いているものだ	0.667	2.000	0.839	2.666*

\*p<0.05 \*\*p<0.01

;分散分析 数値はF値である。df = 3 6 信念, 9 情動の中で有意差の認められた項目を記載

情動としては比較的長く持続するといった特徴を持っている。

父親は母親に比べ、日頃子育てを中心的に担っているということではなく、むしろ母親をサポートしながら子どもの成長や発達をとらえて接することが多いことから、心配や不安を中心としたストレスとなっていることが明らかとなった。また、子どもと接して生ずる「怒りやイライラ」は、母親と同じ傾向を示しており、父親、母親に関係なく一般的な育児ストレス項目と考えられる。

## 2. 育児ストレスの内容

父親の育児ストレスは、9 要因に分類された。これは母親の13 要因<sup>7)</sup>に比べ、かなり項目として限定されているといえる。内容としては母親と共通している要因が多く、件数からとらえた順位は異っているものの、育児ストレスとしては共通していた。

もっとも多かったのは、子どもの自己本位な特性で、特に「かわいがっているのに母親のほうが好き」とか、「パパ嫌いといわれたとき」などが、内容としては母親には見られない特異

表4-2 父親の育児信念の強さと情動別ストレス度

育児信念項目	情動					
	心配	怒り	イライラ	疲れ	むなしさ	悲しみ
<子どもに対する愛情> 父親とは子どもに対して無償の愛を与えるものだ	1.246	2.432*	0.448	5.599*	0.131	2.378*
<育児姿勢の努力> 子どもが良く育つも悪く育つも100%親の努力にかかっている	3.206*	1.447	1.603	0.303	0.279	2.614*
<育児に対する価値> 子育ては自分にとって価値がある	0.746	1.525	0.987	2.268*	1.36	3.997*
<女性としての役割> 子育ては女の仕事だ	1.062	1.464	3.5*	0.461	2.48*	1.325
<子どもに対する愛情> 父親は子どもに対し無償の愛情をいつも抱いているものだ	2.06*	1.039	0.632	2.923*	1.916	3.358*

\*p&lt;0.05

;分散分析 数値はF値である。df=3 6信念, 9情動の中で有意差の認められた項目を記載

表4-3 父親の育児信念肯定と情動別ストレス度

項目	情動	
	不安	
信念肯定	2.655*	

\*p&lt;0.05

;分散分析 数値はF値である。df=3 6信念, 9情動の中で有意差の認められた項目を記載

なものであった。子どもの自分に対する愛着や愛情についての受け止めが悲しみやむなしさなどのストレスとなっていた。

ついで「子どもの成長への気がかり」や「育児への自信のなさ」が多くを占めており、母親のストレスと重なっていた。

父親と母親に共通した内容は「育児への自信のなさ」であり、育て方に自信が持てない、これでいいのか、どのように子どもに思いを伝えればいいのかなど、子どもとの関わりに悩んでおり、特に虐待しているのではないかと感じるときに恐怖を感じていた。その他、「混沌とする社会事情」や「育児環境の不備」など共通したストレスを抱えていた。

また、母親には見られない項目に着目すると、「自分に対して」があった。特徴としては、自分自身に対してのストレスであり、母親に認められた自己疎外感に共通した内容が含まれているものの、それは「子どもと接する時間が少な

いこと」や「自分のことを最優先しがちなこと」、「家族のために働きそれだけに明け暮れること」や「年を取っていく自分」や「子どもと接して疲れる自分」に対するものであった。

さらに、妻に対しては「妻が子どもに当たっていること」や「子どもに甘い」など、関わりに不満のある内容や、「手伝ってやりたくてもできない」や「妻の体力が心配」であった。また、母親のストレスでは父親に対する不満の内容が多く認められたが、父親は逆に、やっても認めてもらえないことに対する不満やむなしさを抱いていた。このようなストレスは、父親のストレスの特徴と考えられる。

母親の育児ストレスには独立して存在しているストレス項目とともに互に関連し合って存在しているストレス項目があったが、父親の育児ストレスはそれぞれ独立して記述されていた。このことから、父親の育児ストレスは比較的単純な構造を示していることが推測される。

父親の育児ストレスの全体像は図1に示されるように、主なるストレスラーとして、「子どもの自己本位な特性」を中心としながら、平均数以上の「子どもの成長への気がかり」、「育児への自信のなさ」、「自分に対して」があり、副なるストレスラーとして、「混沌とする社会事情」、「育児環境の不備」、「仕事との両立」、「妻との関係」、「自分の行動への干渉」があった。

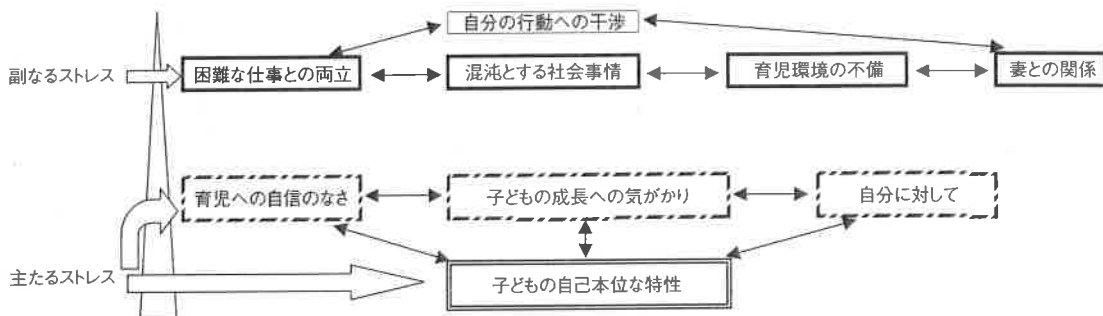


図1 父親の育児ストレス全体像

また、育児ストレスは、子どもや育児の仕方に関するストレス（表2－①②③）と育児環境に対するストレス（表2－⑤⑥⑦）、自分を含めた人とのストレス（表2－④⑧⑨）に分類して考えることができる。

### 3. 育児信念と情動別ストレス度の関係

育児信念6項目を肯定する信念傾向を持つ父親は不安を感じていた。育児信念を肯定するほど父親の不安傾向が高まることが示唆された。おそらく「こうあらねば」と信じるのが、結果として「そうできないとき」に不安を高めるのではないかと考えられる。

また、子どもに対する愛情の信念を肯定する父親は、「悲しみ」や「むなしさ」を感じており、育児に対する価値を認める父親は「イライラ」を感じており、子どもに対する態度である完璧さを肯定する父親は「不安」を感じていた。これらのことから父親の育児信念と情動との関係性が示唆された。特に子どもへの愛情は時に父親のむなしさや悲しみを生じさせており、それは子どもの反応によるものと考えられる。愛情や価値に対する強い信念をもつ父親は、「悲しみ」や「疲れ」を感じており強く信じ込むことがストレスの誘因になっていると考えられる。

育児信念に対する今回の結果を、母親の結果<sup>10)</sup>と比較すると、子どもに対する愛情と育児に対する価値を肯定するなど、ほぼ同じ傾向を示していた。また、育児信念には父親と母親による性差はなく、親として共通した考えを持っていることが示唆される。

### 謝 辞

本研究にご協力いただいたお父様方、保育園の先生に心より感謝致します。

### 文 献

- 1) 内閣府大臣官房政府広報室編. 月刊世論調査. 男女共同参画社会 2001; 33: 3-63.
- 2) 岩田祐子・森 恵美・前原澄子. 父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因. 日本看護科学学会誌 1998; 18: 21-36.
- 3) 清水嘉子. 母親の育児ストレス国際比較: 韓国(京畿道)・中国(北京)・ブラジル(ブラジリア)・日本(静岡)から. 母性衛生 2004; 45: 101-111.
- 4) Lazarus, R. S., & Folkman, S. (eds.); 1984. Stress, Appraisal, and Coping. New York: Springer Selye, H. 1956/1976 The Stress of Life. New York.
- 5) 柏木恵子・永久ひさ. 女性における子どもの価値: 今なぜ子どもを産むか. 教育心理学研究 1999; 47: 70-79.
- 6) 清水弘司. 幼児を持つ母親の「よい子」「よい母親」「よい父親」概念. 家庭教育研究所紀要 1994; 15: 33-43.
- 7) 清水嘉子. 育児ストレスの実態研究: ストレス情動反応を中心にして. 母性衛生 2003; 44: 72-78.
- 8) 清水嘉子. 母親の育児ストレスと夫の家事育児協力の関係. 子どもの虐待とネグレクト 2003; 5: 96-106.
- 9) 山下 格. 精神生理学的基盤. 諏訪 望・西園 昌久(編), 現代の精神医学大系7A 心身疾患



I：中山書店，1979.

- 10) 清水嘉子. 母親の育児ストレスと育児信念の関係. 小児保健研究 2003; 62: 558-568.
- 11) 菅原ますみ. 父親の育児行動と夫婦関係, そして子どもの精神的健康との関連. 教育と情報 1998; 483: 7-12.
- 12) 小野寺敦子. 父親になる意識の形成過程. 発達

心理学研究 1998; 9: 21-30.

- 13) 尾形和男. 父親の育児と幼児の社会生活能力: 共働き家庭と専業主婦家庭の比較. 教育心理学研究 1995; 4: 35-42.
- 14) 石井京子, 藤原千恵子, 日隅ふみ子. 父親としての意識の発達に及ぼす養育行動の分析. 小児保健研究 1998; 57: 767-772.